

## 第八章 生活と風習

### 1. 野あがり

農家の田植え後の休みの日である野あがりに蒸し餅を作つて食べた。一般的には、「いばら餅」と呼ばれているが、神前地区では、「がんたち餅」ともいう。小麦粉をこねて形を作りそれを「がんたち」や「みょうが」の葉にくるみ蒸したもので、中にあんが入つてゐる。

子供たちにとっては、がんたちの葉を山へ取りにいくのが楽しみであった。

### 2. 農休日

田植えが済むと野あがり休み、雨乞いの願をかけて雨が降れば雨の祝いなど、村中一斉に休む日があった。その日には「いばら餅」「ぼたもち」を作り、若嫁さんはそれを持って実家へ里帰りが出来て楽しいお休みとなる。

一斉休みを村人へ連絡する方法としては、小使いさんが各戸へ知らせるとか、主要な場所へ貼り紙をして周知した。

### 3. 水車小屋

コットン、コットンとゆっくり回る水車は水の流れを利用し、それを動力として米搗き、臼すり（臼すり）、粉挽きが各地で行なわれていた。また藁仕事のための藁打ちも行われていた。水車小屋の臼に玄米とみがき砂を入れて一中夜の時間をかけての米つきは、水車仲間が集まって運営されていた。水車小屋での米を搗くコットン、コットンという杵の上げ下げの音色が唄に歌われている。

神前地区の水車も、昭和40年頃までは、寺方町2ヶ所、高角町8ヶ所、曾井町2ヶ所、尾平町4ヶ所の共同水車



水　　車

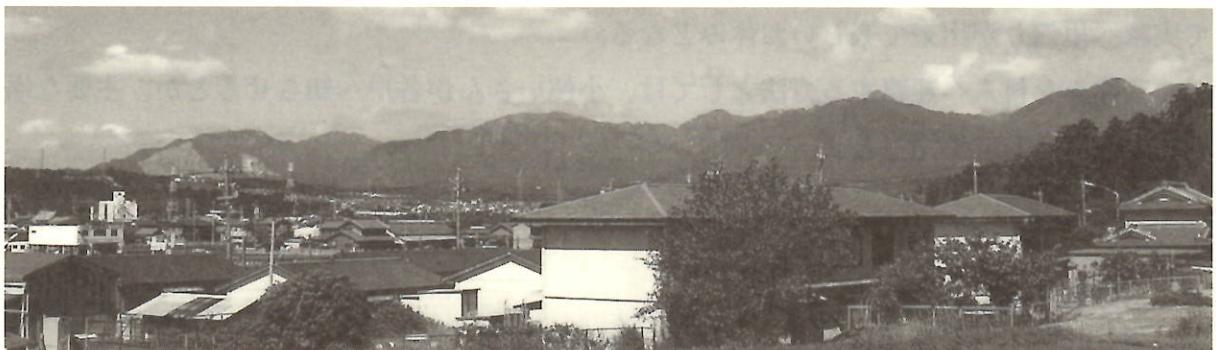
と、車屋と呼ばれる個人が管理する水車が、4ヶ所稼動していたが今はもう見ることができない。

#### 4. 村の天気予報

ラジオもテレビもない時代に、天候の情報を知る手段として雲の様子、風の変化、気温の変化などで天気を予測することが、生活の中に取り入れられていた。優れた気象情報を得ることができる現代でも、地域だけの天気の変化に対応できる知識は、生活をするうえで参考になることも沢山ある。

特に神前地区では、西の山（鈴鹿山脈）の変化で天候を予測する。山に雲がかかり、その雲が麓まで下って山全体を覆うと雨が降り出す。山が近くに見えると雨が近い。山が遠くに見えると晴れる。冬山の頂上付近に帶状の雲がかかると西風が強くなる。

また、東方向は海であるが海の事をオキと言い、海が近くに感じられる時はオキが近いので雨が近い。このように神前地区では海からの音を聞いて、山を眺めて天気を判断してきた。

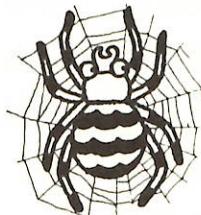


左端が野登山

真夏の雷鳴についても、野登の雷と親元のぼた餅来ぬためしなし（野登から雷が鳴ってきたら必ず雨が降る）。反対に北西方向からの雷は雨降らず。朝雷に川越しするな（朝の雷は川を越えて帰れなくなるほど大降りする）。昼雷は親元のぼた餅来ぬためしなし（必ず雨が降る）。夕雷に傘を置き（雨は期待できない）。など同じ雷でも鳴ってくる方向・時刻によっては、雨の量に大差があるようである。このことは現代の雷情報と比べてもこの地域だけを考えると重要な情報だと考えられる。

また、鳥とか動物・昆虫は天候の変化に敏感であり、その動きに注目したものに次のようなことがある。ひばりが高く上ると翌日は晴。雀が朝から鳴く時はその日は晴。雀の水浴びするときはその日は晴。鳩が朝鳴く時は雨が近い。つばめが低く飛ぶと雨。蝉が夕暮れに声高く鳴く時は翌日は晴。蜘蛛





蜘蛛が軒に巣を張れば雨になる。蜘蛛が自分の巣から離れるときは大雨となる。蜂が小屋の中に巣をかけると台風がくる。蜂が木の根元に巣をかけると、その反対方向から台風がくる。蛇・むかでが木に登ると雨が近い。かまきりの巣が高い所に作られる年は大雪になる。等々生き物の動きで天候の変化を知ることは、経験によって教わった知識であって確実性があるとは考えられない。

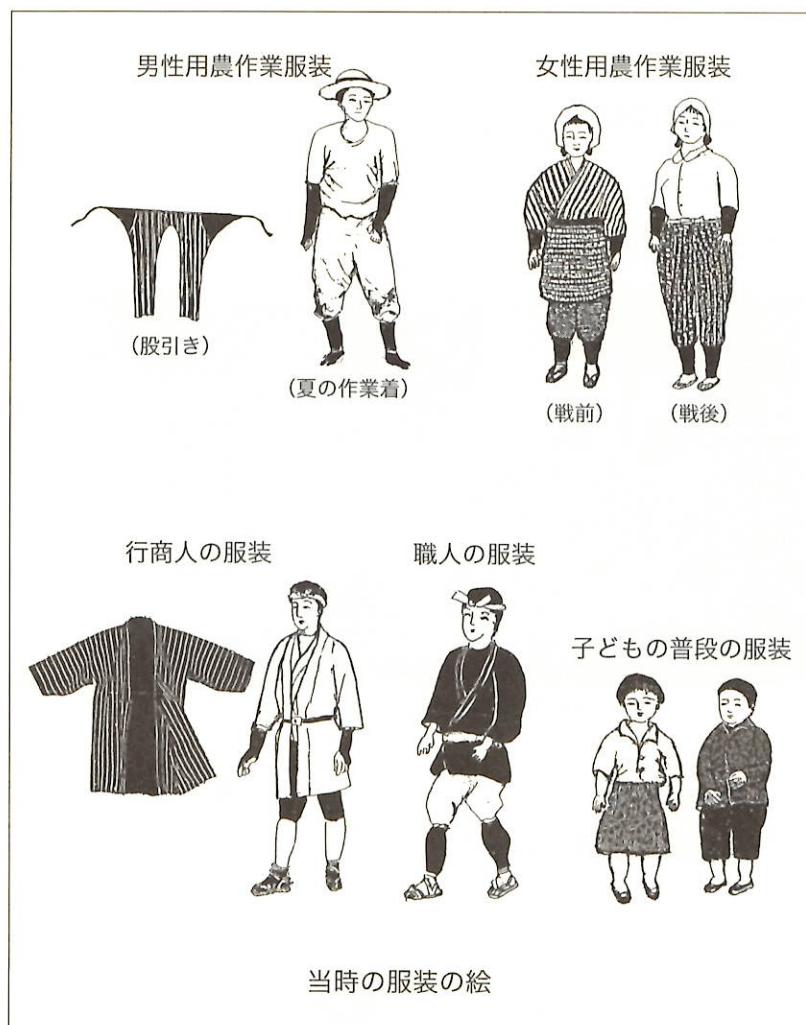


## 5. 昔の服装

**普段着**：昭和初期までは男女とも着物であった。男性は夏には紺の着物に紺の木綿の襦袢、  
あいものにはセルの着物、冬になるとネルの袷の着物にハンコを着た。下着は晒しの越中ふんどし（三尺ふんどしといって巾一尺で長さ三尺の布の片端に紐を縫い付けたもの）を締めていた。女性は紺色の紺の着物に夏には晒し木綿、冬はネルの肌襦袢を着た。帯は兵児帶、しごき帯、三尺帯（色柄付き）、角帯などであった。また、前掛けの役目をする腰巻きを身につけた。

普段着の季節による区別はあまりなく、着分けするほどの生活の余裕もなかつた。しかし、祭りや正月には銘仙やりんずの着物を着る人もあり、それが当時の高級品であった。子供も紺の着物で、女の子には縞模様があつた。

紺の着物は普段着だけでなく通学の際にも着用したが、昭和2～3年頃はほとんどが着物、昭和5～6年頃は着物と洋服が半々（小学校高学年から服に）、昭和8～9年頃はほとんどが服、昭和10年以降は全員が服と変化していった。



寝る時の衣料には特別なものはなく、下着で寝たり時にはふんどし一枚で寝た。女性は下襦袴とおこし（腰巻き）で、また子供は金太郎腹巻をする子もいれば、何も身につけない子もいたという。寝巻を着るようになったのは昭和25年頃からである。夏は浴衣、冬はネルの寝衣であった。

履物は自家製の草履を1年中履き、雨の日は下駄を履いた。鼻緒は布製や皮製。冬にはコールテンやベッチンの足袋も履いた。外出にはアサウラ（麻裏草履）を履いた。長靴を履くようになったのは、昭和8～9年頃からで、昭和20年頃からはアメ靴（生ゴム靴）も出回るようになってきた。

**仕事着**：仕事の種類によって異なるが、農作業の場合は野良着である。当地区では米作りだけでなく、養蚕や麦作りがあったが野良着は、季節によって着るものを替えるわけではなく、年中同一の物を着て寒い日は重ね着をした。男性は紺の木綿の襦袴と股引、脚半で、冬は木綿のドテラを着た。女性は紺の絹の短い着物、腕に衣小手、腰まわりには前掛、足には脛巾であった。

戦後は下衣にモンペをはいた。

## 6. 高角神田天白神社の行事

寺方町二区の町内では、氏神さまの祭祀をめぐってさまざまな役割がある。まず、宮世話が各組から一人づつ出て奉仕する。秋の大祭には村中が参拝するが、その他は小祭りにつき宮総代と宮世話のみが奉仕している。宮総代は二人で、各組より出ている宮世話とともに秋の大祭と水無月祭り、新嘗祭、みくわ祭りなどの小祭りに年間9回ほど出役しなければならない。小祭りは、供え物をして神主による神事がある。



秋の大祭ののぼり立て

秋の大祭は試楽、本祭り、山おろしと3日間催される。試楽は、祭りの準備と宵祭りにあたる日である。祭礼には轍がたてられるが、試楽に轍をたてて山おろしに轍を降ろす。この3ヶ日のいずれか1日、宮世話以外の氏子は奉仕しなければならない。これを日役と言い各組でくじをひき出役日をきめている。

また、これらの役割とは別に籠宿と言つて特別な家が試楽の日におみくじで決められ

る。どこの家が竈宿に当たったかを知らせに行くのは宮世話の役目である。

本祭りの日、竈宿に決まった家の軒先に太鼓が持ち込まれ、子供や青年達が太鼓を叩きにいく。また、山おろしのあと氏子の大達がここへ集まり酒肴の宴がもたれる。竈宿に当たると「厄をのがれられる」と言って名誉に感じると同時に、経済的には負担にもなったものである。酒肴に用いた費用は、山おろしの日

に計算して氏子より集められ精算されるが、それだけではすまない時が一番困るのである。竈宿は、祭りの後の宴の場であり、氏子の総べての大達がここに集まるので一種の寄り合いの様相を呈する。

昭和57年神社に拝殿が新築され、そこが寄り合いの場所となるとともに、負担が大きいと言うことで現在はこの制度は廃絶している。

天白神社の役割を巡っては、もう一つ日供がある。これは毎朝神社に、水・塩・かし米・お神酒を供える役割で、毎日順番に各戸をまわっている。これも一家の主の役目だが最近は女性の姿も見受けられる。



高角神田天白神社の日供